

令和元年度 北九州市発達障害者支援モデル事業

アセスメントツール開発

I. 事業要旨

発達障害児者は、環境や支援により状態像が著しく変わることもあり、支援者が個々人の状態やニーズを明確にし、適切な支援につなげることで、その情報を引き継いでいくことが重要である。そのため、市内のどの支援機関においても、同じアセスメントツールを活用できるよう展開することが望まれる。市内の事業所を対象に実施したアンケートにおいても、事業種や対象としている発達障害児者の年齢等によって、必要なアセスメント情報は異なるが、共通したアセスメントツールがあれば活用したいという意見が複数あった。

北九州市には、発達障害の子をもつ親の会三団体に協力いただき作成したサポートファイル「りあん」がある。本人の状態を整理するために必要な情報が、概ね網羅されており、事業所にインタビューを行った際にも、「りあん」を有効に活用できると良いのではないかという意見が複数あった。そこで、平成 30 年度は、放課後等デイサービスを主な対象機関とし、事業所の実態に即したツールを作成するため、実務者によるワーキンググループを設置し検討を行った。「りあん」の情報を保護者や関係機関が有効に活用するために、①「りあん」の形態を大きく変えずに活用できるようにすること、②経験や知識の少ない支援者でも、発達障害の特性や個々人の状態を整理できるように、観察や情報収集のためのポイントをわかりやすく示すこと、③個別支援計画につなげられるように配慮することとし、「りあんを活用したアセスメントの手引き」（放課後等デイサービスなど学齢期を対象）を作成した。

ワーキンググループ参加メンバーの職場で実際に対象児を決めて、記入してもらったため、今年度は、活用する場合に難しいと感じることと、事業所で活用することへの可能性等について、アンケートを実施した。結果を踏まえ、「記入例」を作成するとともに、「りあんを活用したアセスメントの手引き」（放課後等デイサービスなど学齢期を対象）、「記入用紙」、「記入例」を、つばさのホームページ上に掲載し、記入の仕方や、活用方法について、希望の事業所には、訪問して説明を行うことを記載した。

今年度は、成人期を対象とした、「手引き」の試行版を作成したため、3月初旬に成人期を対象とした4つの障害福祉サービス事業所に、協力依頼を行った。4月の、利用者のアセスメント、個別支援計画作成の期間に、対象者を決めて活用してもらい、5月初旬にアンケートを回収する予定である。対象の施設は、学齢期と同様、平成 29 年度に実施したインタビューの結果を参考にして、依頼を行った。「りあん」では、職業に関する項目が少ないが、就労移行支援事業所などの現場では、障害者職業総合センターが作成した「就労移行支援のためのチェックシート」等のツールが積極的に活用されているため、生活介護事業所や、就労継続支援 B 型事業所などを対象とした。アセスメントを実施してもらった後に、アンケート調査後、協力事業所の意見を参考に、見直しを行い、ホームページに掲載

する。また、アセスメントツール普及のための、活用方法についての研修会や、希望がある事業所への説明会を実施する。

II. 事業の実施経過

1. 「りあんを活用したアセスメントの手引き」(放課後等デイサービスなど学齢期を対象)作成について

(1) ワーキンググループによる試行版使用とアンケートの結果について

ワーキンググループの所属機関において、平成31年3月25日～4月末日までの間に、対象者を決めて、「りあんを活用したアセスメントの手引き」を用い、アセスメントを行ってもらった後に、アンケートへの記入を依頼した。

アンケート送付は、5月13日に行い、記録用紙とアンケートの回収期間を5月末日までとしたが、対象機関の都合等により、回収終了は、8月初旬となった。

アンケート結果は、資料1-2の通りである。

アンケート記入者は、放課後等デイサービス事業所の児童発達支援管理責任者3名と、児童入所施設の児童発達支援管理責任者1名(経験年数は、9年～20年)である。提供してもらった記入用紙には、社会性やコミュニケーション、行動などについても、詳細に、また、具体的に記載されていた。記入に3時間かかった事業所では、敢えて、経験の浅い職員に書いてもらい、児童発達支援管理責任者であるメンバーが、サポートしたということであった。また、ある事業所は、タイプの違う2名(高機能と重度の知的障害)を対象に、アセスメントを行ったが、パソコンが使用出来ない職員もいるため、敢えて手書きで記載してみたところ、記入自体は、それぞれ、45分と、1時間だったということである。

記入後のアンケート結果では、記入してみて、「より対象者の理解が深まった」、「他職員と一緒に記入することで、職員間で理解が深まった」等の意見がある一方で、難しい点としては、「情報量や作業量の多さ」とともに、「記入に時間を要するため、全ての利用者に対して実施する事は難しい」などの意見があげられている。その他、「記入例があった方が良い」という意見や、入力欄のセルを結合しておくなどし、パソコンで書き込みやすいようにしてほしいという意見等があった。

活用の可能性としては、「情報を整理活用するために有用」など、全てのメンバーが有効と感じており、「成長段階を把握するためにも、全ては難しいので一部活用してみたい」、「特定のケースの理解を深めるために用いたり、職員教育のために用いることは可能」などの意見があった。

(2) 記入例の作成とホームページへの掲載

アンケートの中に、記入例があった方がわかりやすいという意見があったため、小学校低学年の、自閉スペクトラム症の児を想定し、「記入例」を作成した。「りあんを活用したアセスメントの手引き(放課後等デイサービスなど学齢期を対象)」、「記入用紙」、「記入例」、を、令和2年1月に、つばさのホームページ上に掲載した。

(3) 普及のための説明会等について

事業所を訪問しての説明会については、ホームページ上で案内している。現在までに依頼はないが、児童期版を、成人の対象者に使用する事は可能かという問い合わせが一件あった。今後、希望の事業所があれば、説明会を実施する。

2. 「りあんを活用したアセスメントの手引き（生活介護事業所、就労継続支援 B 型事業所など成人期を対象）」の作成について

(1) 試行版の作成

成人期においては、職業スキルも、重要なアセスメント項目であるが、就労移行支援事業所等においては、障害者職業総合センターが研究・開発しているチェックシート等が、すでに活用されているため、「りあんを活用したアセスメント」では、障害福祉サービス事業所を、一定期間継続して利用することが想定される、生活介護事業所や、就労継続支援 B 型事業所等を利用している成人期の利用者を対象とした。

活用するサポートファイル「りあん」のページについては、学齢期と同じ、「成長の過程」と、「現在の状態」①のページを使用し、成人期に更に必要と考えられる項目や、成人期のアセスメントの留意点や、目標の考え方を追加し作成した。（試行版では、追加した箇所の文字を斜体字で表記している。）

「りあんを活用したアセスメントの手引き（生活介護事業所、就労継続支援 B 型事業所など成人期を対象）」（試行版）は、資料 1－3、記入用紙は、資料 1－4 の通り。

(2) 成人期の施設への協力依頼

① 対象事業所の選定について

メンバーの選定については、平成 29 年度に実施した、障害福祉サービス事業所のインタビュー結果等を参考に、「りあん」を活用している、あるいは、今後の活用を期待している事業所や、アセスメントに対する意識が高いと考えられる事業所、発達障害の方を多く支援している事業所の中から以下の 4 事業所を選定し、依頼を行った。

- ・ 生活介護事業・就労継続支援 B 型事業所 A サービス管理責任者
- ・ 生活介護事業・就労継続支援 B 型事業所 A 支援員
- ・ 自立訓練事業所（生活訓練） 支援員
- ・ 自立訓練事業所（宿泊型自立訓練） 支援員

② 「りあんを活用したアセスメントの手引き（生活介護事業所、就労継続支援 B 型事業所など成人期を対象）」作成のスケジュール

令和 2 年 2 月に、対象事業所に趣旨を説明し、協力依頼を行った。対象事業所に集まってもらい、試案についての意見交換を行う予定であったが、新型コロナウイルス対策により中止した。そのため、個別に訪問し、試案についての説明を行った。アセスメントの対象者を決めて「りあんを活用したアセスメントの手引き」（成人期の福祉サービス事業所利用者を対象）（試行版）を用いてもらう事と、記入用紙、事後アンケートの提出を依頼した。

各事業所では、「成長の過程」について、事業所を利用するまでの経過情報が無いということであったため、情報収集が可能な範囲で記入してもらうこととした。5月初旬にアンケートを回収し、意見を参考に改定版を作成する。アンケート用紙は、資料1－5の通り。

(3) 普及のための取り組み

成人期版についても、つばさのホームページ上での掲載（「手引き」、「記入用紙」、「記入例」）を行うとともに、事業所での説明会の希望を募る。また、児童期版とともに、障害福祉サービス事業所（放課後等デイサービス、生活介護、就労継続支援B型事業所、自立訓練事業所等を対象とした説明会を企画し、参加を募る。

III. 考察

市内で共通して用いることが出来る、アセスメントツールを検討する中で、サポートファイル「りあん」を活用することができたことは、今回の取り組みにおける一番の成果であると考えられる。「りあん」は、本人の所属機関や、ライフステージが変化しても、情報を共有していくことができるように、という願いのもとに作成された。しかし、基本的には、家族が記入するものであり、記入に慣れていない家族には、記入が難しい箇所があることや、記入量が多い事などから、地域で十分活用されにくい側面があった。しかし、障害福祉サービス事業所等の支援者が、アセスメントツールとして活用することで、「りあん」の長所でもある、①現在の本人の状態や発達障害の特性を整理することができるとともに、経過を追うことが出来る、②家族が持つサポートファイル「りあん」と、同じものを使用する事で、家族と関係機関間が情報を共有できやすくなる、③手引きを活用することで、アセスメントのポイントが、発達障害の知識が少ない支援者でもわかる。（家族も記入の際に活用できる）等のメリットがあると考えられる。

成人期版（試行版）を作成する過程で、児童期も成人期版を活用した方が、将来身につけるべき生活スキルなどを、見通すことが出来て良いのではないかと考えられた。そのため、成人期（試行版）のアンケート回収後は、内容を精査するとともに、成人も児童も使用出来るよう、ツールの一本化を検討したい。内容を、各障害福祉サービス事業所の機能や本人の状態に合わせてアレンジして使用することができる事を、手引きにも明記し、必要に応じて項目を増やしたり、別添で資料を追加するなどして、アセスメントツールとしての「りあん」を有効に活用してもらいたいと考える。

課題としては、普及啓発と、個別支援計画への反映が挙げられる。普及啓発については、ホームページで紹介するだけでなく、市内の障害福祉サービス事業所を対象とした、説明会を開催する。また、併せて、つばさが個別のケース相談や機関コンサルテーションを実施する中で、活用を提案していきたい。初めてアセスメントツールとしての「りあん」に記入する際には、確認しなければならない項目も多く、時間がかかるが、家族や、相談支援事業所が同じツールに記入することで、情報の集約が出来やすくなり、また、アセスメント情報を参考に、支援目標や支援計画を確認、共有していくツールとしても、活用が期待出来ると思われる。